

カステイージャの昔祭り
エル・コラーチョ

PERVIVENCIA DE UNA ANTIGUA
FIESTA CASTELLANA
EL COLACHO

ELENA GALLEGO ANDRADA
エレナ・ガジェゴ・アンドラダ

En un pequeño pueblo del norte de España, llamado Castrillo de Murcia, situado en la provincia de Burgos, región de Castilla y León, debido a su origen y a su aislamiento de influencias exteriores, perviven un rico muestrario de fiestas y costumbres en las que todo el pueblo participa como protagonista.

La más famosa de ellas es la fiesta del Colacho, de ancestrales raíces paganas, a la que se han incorporado elementos culturales y religiosos precristianos, incluso es posible que pueda estar relacionada con las fiestas Lupercalia, que se celebraban en la antigua Roma.

El Colacho, protagonista de la fiesta, es un personaje alegórico que representa al demonio y, por tanto, es feo, repugnante, astuto y dañino.

Uno de los momentos más divertidos de la fiesta es cuando los niños del pueblo le insultan, se burlan y huyen de él y de sus “zurriagos”. Y el momento cumbre es cuando el Colacho salta por encima de los bebés nacidos ese año, acostados sobre colchones, acto que simboliza la exorcización del demonio y de los espíritus malignos de la vida de los bebés.

Sin embargo, ¿cómo era dicha fiesta en sus comienzos y cómo es en la actualidad? ¿qué elementos y aspectos han desaparecido y cuáles han pervivido? Es evidente que la mentalidad de aquella época, así como la concepción de la religión y la naturaleza, eran totalmente distintas a

las actuales. Este hecho ha condicionado la inevitable evolución de la fiesta y su adecuación a los tiempos.

スペイン北部、カスティージャ（Castilla）地方はブルゴス（Burgos）県の県都ブルゴス市から西のレオン（León）に向かって40キロのササモン（Sasamón）の近くにカストリージョ・デ・ムルシア（Castrillo de Murcia）という、人口わずか208人（2005年）の小さな村がある。

本題に入る前に村の名前からその歴史の一端を探ってみたい。まず最初のカストリージョはカストルム（castrum 砦）に縮小辞が付いたもので、差し詰め「小さな砦」を意味する。ブルゴス市の司教座聖堂所蔵の古文書にCastellum MuzalまたはCastillo de Muzaと記されているところから、かつて中世にはここに砦があったことは確かであるが、その砦があったとおぼしい場所には現在は道路が通っている。

次はムルシアだが、これはスペイン南東部にあるムルシア県及びその県都とは無縁であり、上記のムーサに由来するとみるべきであろう。では、このムーサとはなにかと言えば、これは8世紀初頭にイベリア半島に侵入したイスラム軍の総指揮官の名前である。ムーサが征服戦の過程で東のサラゴサ（Zaragoza）から西のレオンに向かう途中でここに留まり、砦を築いたのが村の起源になったと考えられる。その後、この一帯はキリスト教徒とイスラム教徒との間に繰り広げられた長い戦争（レコンキスタ）の舞台となって多くの砦や城が築かれたが¹、古文書に「ムーサの砦」の名で出てくるカストリージョ・デ・ムルシアもまさしくそのうちのひとつであったと推測される。

カストリージョ・デ・ムルシアは交通の便に恵まれず、長い間外部から隔絶した状態にあった。現在でも村と外の世界を結ぶのは一本の道路と村人の用事のために週に何本か運行されるバスだけである。

村人の家屋は石造りの玄関以外は一見貧しさを象徴するかのようなアド

ーベ（日干し煉瓦）造りだが、グローリア（gloria）と呼ばれる床暖房が必要なほど冬の寒さが厳しいこの土地にはこのアドーベが最も適した建築素材である。カストリージョ・デ・ムルシアのこうした閉ざされた環境の中で守られてきた伝統のひとつに恐らくは起源がローマ時代に遡ると思われる異教色の強いエル・コラーチョ（El Colacho）という悪魔祓いの祭りがある²。

この祭りの中心となるのは聖体の祝日（Día del Corpus）³だが、その数日前から教会は言うに及ばず村中の大きな家も小さな家もさまざまに飾り立てられ、事実上祭りが始まる。ただ飾りと言っても、特別なものではなく、各家がそれぞれ大事にしている手編みのベッドカバーやその他の生活用品をバルコニーに広げるだけである。中には国旗を掲げる家もある。エル・コラーチョは人に見せる祭りではなく、参加することに意味がある祭りなのである。

祭りの主役は悪魔役のエル・コラーチョとキリスト教を代表する形で太鼓を打ちながら聖体を納めた聖櫃の存在を人々に知らせる役のアタバレーロ（Atabalero）の二人である。後で述べるように、時としてエル・コラーチョが二人になる場合もある。エル・コラーチョは赤い縁取りとフードの付いた黄色の上着とズボンを身につけ、顔にはグロテスクで恐ろしい形相のビーリア（birria）と呼ばれる仮面を被り、手にはフラメンコで使われるカスタネットにその形が似ているところからカスタニュエラス（castañuelas）と呼ばれる木製の大きな銅鑼状のものとこれを叩く棒



Foto: Diario de Burgos

(zurriago) を持っている。一方、アタバレーロの方は長いマントに身を包み、頭にはシルクハットを被り、背中からはその名前の由来となっているアタバル (atabal) という大きな太鼓を太い紐でぶらさげている。

祭りが始まると毎日夕方にはエル・コラーチョとアタバレーロを先頭に信心会 (cofradía) の会員が二列を作って夕べの祈りのために村の教会に向かう。信心会の会員は皆、鏝広の黒い帽子に毛織りの黒いマントというカスティージャ地方の伝統的な身なりでやってくる。行列は教会に着くと、中へ入る前に全員が頭をさげて一礼する。この時、エル・コラーチョは仮面を外し、信心会員は帽子を脱ぐ。中に入るとエル・コラーチョとアタバレーロが祭壇の脇に立ち、一同が見守る中でそれぞれの楽器を打ち鳴らす。その音は歌舞伎や能の舞台の端で床を叩いて発せられる音を想わせる。

夕べの祈りが済むと祭りの最も賑やかな場面が展開する。皆が二列を作り、その先頭をエル・コラーチョとアタバレーロがそれぞれ自分の楽器を打ち鳴らしながら進む。そしてそのすぐ前では子供達が口々にエル・コラーチョを罵ったり嘲ったりして囃し立てる。この時に子供達が好き勝手に口にする文句にはいろいろと的を射たものがあるがなかなか面白い。そうこうするうちにエル・コラーチョが突然手に持った棒を振り上げて子供達を追いかけ始める。棒の先は鞭になっていて、子供達はこれに打たれまいと必死に逃げる。この楽しくもちょっとスリルのあるこの追いかけごっこは修道士達が聖務日課の夕べの祈りを唱える時刻に合わせて祭りの間、毎日繰り返される。



Foto: Diario de Burgos

しかし、祭りで最大の見物は赤ん坊から悪魔を追い払う儀式である。午

後の1時頃、ミサの後の教会の鐘が鳴ると、その年に村で生まれた赤ん坊と村になんらかの縁のある人達の赤ん坊が地面に敷かれた日本の布団に似た敷物の上に寝かせられる。普通は8人から15人程度の数だが⁴、赤ん坊の数が多ければ敷物は2枚敷かれて、エル・コラーチョも2人になる。準備ができると、エル・コラーチョは距離を慎重に測ってから助走し、寝かされた赤ん坊の上を一気に飛び越える。一步間違えば取り返しのつかない事故に繋がるこのジャンプのためにエル・コラーチョ役を務める者は一年中訓練を欠かさないとされる。エル・コラーチョが飛び終わると、神父が赤ん坊に近づいて祝福を与える。この間、人々は一瞬静まって厳粛な面持ちになる。続いてその年に初聖体を受けた子供達が赤ん坊の上にバラの花びらを撒き散らす。神父は奉献後の葡萄酒を飲み⁵、予め盆の上に用意された麦の穂を撫でる。これには神に豊作を願う意味が込められているように思える。

この儀式が終ると人々は村の高台に集まって輪を作る。そして信心会員の一人が下記のような挨拶をしてから村の歴史と絡めて伝統あるエル・コラーチョの祭りの謂れを語り、これからも毎年この祭りを忘れることなく祝おうと呼び掛ける。

古から伝わるこの厳粛な祭りを再び祝い、エル・コラーチョなる奇妙な人物を観るためによくぞカストリージョ村へお越しくださいました。

しばし、お聞きください。当村の信心会、太鼓、若衆、仮面方、銅鑼、叩き棒について一言ご説明申し上げたい。その後は通りに並ぶ酒蔵でわが村の地酒と焼きたてのパンと焼肉で存分にお過ごしください。

話が終ると村人も他所から祭りを観にきた人達もまるで洞窟のような酒蔵に入って行く。大体、村のどの家にも酒蔵があり、そこで人々は仔羊の焼肉と地酒を心行くまで堪能する。以上がエル・コラーチョの祭りの概要である。

ブルゴス出身の歴史家アンセルモ・サルバー（Anselmo Salvá, 1849—1922）によれば、かつて県都ブルゴス市にもエル・コラーチョとそっくりの祭りがあった。ただし、悪魔の名は「悪魔の頭目」という意味のカピディアブロ（Capidiablo）だった。確かに古文書にはこの名で呼ばれる道化芝居が13世紀頃にはエル・コラーチョと同じく聖体の祝日にブルゴス市で演じられていた記録が残っている。だが、今日この祭りのことを知っている人はブルゴス出身者の間にも見当たらない。

カストリージョ・デ・ムルシアがいかに交通の便が悪いといっても、完全に時代の流れから取り残されてきたわけではない。外部の変化は絶えず村に及び、エル・コラーチョの祭りも現在ではそっくり昔のままというわけにはいかない。一部には、現在のエル・コラーチョはかつての姿と比べると、手足をもぎ取られたようなものだという声さえある。例えば、古文書によれば、エル・コラーチョはミサの最中にさまざまな動作や仕草で信者の気を逸らすなどして盛んにミサの邪魔をしたという。彼が手に持つ大きなカスタネット型のもは到底楽器である筈はなく、真面目にミサに参加している人達をからかう道具であった。とするならば、エル・コラーチョのこの役目（？）は現代の信者達の感性からすれば到底容認されるものではないであろう。

エル・コラーチョに変容を強いてきたのは時代の流れや外界からの影響、はたまた信者の感性の変化だけではない。当の村の中にさらに強力な圧力をかけてくるものがあつた。教会である。教会は古くからエル・コラーチョはキリスト教以前の異教の祭りであり、キリスト教とはおよそ無縁な行事であると看做してなんとかこれを止めさせようとしてきた。教会はエル・コラーチョの消滅を願いこそすれ、これを村の伝統として守り続ける意図は持ち合わせなかった。こうした教会の姿勢を物語る端的な例としてかつて祭りに付き物だった踊りの消滅がある。1775年頃、村の教会を担当していた神父は信心会をはじめ村人がこぞっての反対を押し切って踊りを廃絶に追い遣ってしまった。以来、1979年にフスト・デル・リーオ

(Justo del Río, 1894—1985) という舞踊の専門家の研究と努力が実って復活するまでの200年以上もの長い間、エル・コラーチョの踊りが人々の目に触れることはなかった。村人が踊りの復活を歓迎したことは断るまでもない。因みに、この踊りは、16歳以上の8人から12人ほどの信心会の会員が鈴の付いたズボンをはき、手にも1ダースもの鈴を持って聖体を納めた聖櫃の前で演じられる。

こうした祭りの変遷の経緯はさておき、エル・コラーチョの特異さは我々の好奇心をそそらずにはおかない。当然、なるべく完全な形で後世に伝えていきたいという声も起きてくる。そしてそのためにはこの古い祭りの意味をよく見極めることが肝要となってこよう。そこで改めて観察すると、差し当たり次の点が指摘される。

第1点は、エル・コラーチョが終始悪魔そのものであるという点である。これはエル・コラーチョが恐ろしい形相の仮面を被り、手には子供達を打つ鞭を持っていることに表されている。人間は古くから災いや不幸に見舞われる度にそれを悪魔の仕業に帰してきた。そしてエル・コラーチョはまさにこの悪魔の化身に他ならず、祭りの中で子供達がエル・コラーチョに罵声を浴びせるのは、災いをもたらす悪魔への反感や恨みを晴らす行為と解釈できる。

次に注目すべきは、そうした悪魔エル・コラーチョがその一方では子供達にまで嘲られ、からかわれる道化の衣装をまとっている点である。明らかに異教起源を窺わせるその道化姿は本来恐ろしい悪魔には似つかわしくない。これは人々が自分達の力を超える悪魔を道化者に仕立てることで、人間以下の存在に引きずり下ろしてその力を押さえ込みたいという願望の表れと見なせよう。

最後は、祭りの中心を占める聖体の祝日に行なわれるエル・コラーチョが寝かされた赤ん坊の上を飛び越える儀式である。この時にもしも飛び損なえば、それこそ悪魔の仕業となろうが、エル・コラーチョが赤ん坊を無事に飛び越えれば悪魔が去ったことを意味する。そして災いを免れた赤ん

坊を神父が祝福する。これは悪に対する善の勝利、言い換えれば、異教の悪魔に対するキリスト教の勝利を象徴している。さらに視点を変えれば、異教の残滓を苦々しく思う教会が祭りそのものは許容する形で異教に妥協しつつも、祭りにキリスト教色を施すことで村人の信仰のさらなる深化を目指しているとも解釈される⁶。



Foto: Elena Gallego Andrada

人間は長い歴史の中でほんの数世紀前まで自然の前にはまったく無力であった。さまざまな恵みの一方で多くの災いや病いをもたらす自然を人間は神と呼び、恩恵を受ければ感謝し、不幸に見舞われればその怒りをなんとか鎮めようと努めた。そのために時には犠牲を捧げたり、一般に魔術と呼ばれる特殊な祭儀によって神を自らの意に沿わせようとした。祭りの多くはこれら三つの意味を負って生まれたに違いない。エル・コラーチョにしても今日それが理解されている悪魔祓い以上の意味を持っていたであろうが、それを知る手立ては最早ない。

17世紀西ヨーロッパの科学革命以来、自然と人間の関係は逆転した。いまや人間は自然を征服し、これを意のままにしようとしている。災害も病気も原因が究明されてしばしば科学の力で抑え込めるようになりつつあるかに見える。こうして科学の支配領域が拡大するにつれて、祭りの出場は縮小していく。いまでは多くの祭りが本来の意味を失ってフォルクローレ化した。200年振りに復活したエル・コラーチョの踊りにしても、それを観る人々の目は恐らく往時の目ではない。科学優位の現代に生きる者ができるのはこうした祭りの変容を受け入れて、ユネスコの活動に代表されるように、先祖からの遺産として守り伝えていくことであろう。この意味で建物や絵画彫刻といった有形の遺産だけでなく、祭りのような一時の行事

をも無形文化財としてその保存に努める日本の姿勢は注目に値する。

[註]

1. Castillaという地名はラテン語のcastellum（城）の複数形castellaに由来する。
2. ローマ時代にはエル・コラーチョを想わせる子孫繁栄を願うルペルカリア（Lupercalia）という2月15日に祝われる祭りがあった。ローマの建国者とされるロムルスとレムスの2人がオオカミの乳で育ったという伝説に基づく祭儀で、これの司祭が手にする犠牲獣（ヒツジとイヌ）の皮を紐状に裂いたもので打られると女性の不妊が治るとされた。
3. 復活祭に連動する移動祝日で、大体復活祭後60日目辺りの木曜に祝われる。なお、最近では村の外からやってくる親類縁者のために祭りそのものは日曜に行なわれる。
4. 今日、村の住民の多くは老人で、若い夫婦は他所に住んでいる。因みに、2005年には赤ん坊の数は103。
5. 司祭がミサの中で奉献した葡萄酒はキリストの血に変わるとされ、司祭はこれを飲みほす。
6. 西ヨーロッパ各地にいまなおキリスト教以前の諸宗教の痕跡が生きていることは民俗学や人類学がすでに多々明らかにしている。

[参考文献]

- Capmany, A., *El baile y la danza*, [Folklore y costumbres de España] II, Barcelona, 1944, pp.197—475.
- García Ramila, I., *Fiestas y romerías tradicionales y famosas en tierras burgalesas*, Boletín de la Institución Fernán González, Burgos, 1952, pp.461—480.
- Osaba, B. y Ruiz de Erenchum, *Poblados, monasterios y castillos desaparecidos de la Provincia de Burgos*, Boletín de la Institución Fernán González 166, Burgos (1966), pp.23—61.
- Pandl, L., *Introducción al Siglo de Oro. Cultura y costumbres del pueblo español del siglo XVI y XVII*, Barcelona, 1942.

Pérez Calvo, Ernesto, *Fiesta del Colacho. Una farsa castellana*, Monte Carmelo, Burgos, 1985.

Pérez Carmona, J., *Mentalidad y vida del hombre del siglo XII a través del arte burgalés*, Burguense 1, 1960, pp.251—267.

Río (del) Velasco, Justo, *Danzas típicas burgalesas*, Burgos, 1959.

Salvá, Anselmo, *El día del Señor en Burgos*, Monte Carmelo, Burgos, 1937.

VV. AA., *Historia de Burgos*, (Tomos I-IV) Caja de Burgos, Burgos, 2007.